

## ジョクジャカルタ——中部ジャワにおける

### <みやこ>の成立と展開

土 屋 健 治\*

#### Yogyakarta: The Birth and Growth of the *Kraton* in Central Java

Kenji TSUCHIYA\*

This paper is a preliminary attempt to discuss the birth and growth of Yogyakarta in Central Java from a cultural perspective. Yogyakarta is peculiar in its inception. Unlike other Javanese kingdoms before it, the *negara* and *kraton* of Yogyakarta (territory and palace) was created by the Treaty of Giyanti in 1755. In the process of negotiating this treaty with Sultan Mangkubumi, first 'king' of Yogyakarta, VOC (the Dutch East Company at Batavia) always held the upper hand. It was also instrumental in setting the power dispute between the 'kings' of Mataram and Mangkubumi. As a result of the Treaty of Giyanti, Yogyakarta was created as a 'visible' and 'limited' domain in terms of its bounded territory and the registered population in its realm. In the creation of Yogyakarta, we see for the first time in the long history of Javanese kingdoms a curious development in which the 'invisible' and

'unlimited' nature of Hindu-Islam-Java kingdom was circumscribed by the 'visible' and 'limited' nature of a treaty of western origin, that is, the Treaty of Giyanti.

This historical background enabled the ruler of Yogyakarta to concentrate his efforts on the revival of traditional Javanese culture in its most 'authentic' form. This tendency was further accentuated by the existence of the *kraton* of Surakarta; since the Treaty of Giyanti, the latter became a cultural rather than political rival of Yogyakarta. The whole purpose of this cultural revivalism was to rule the people not only by a political means but also the alleged cultural superiority of the *kraton* as an 'exemplary center'. A primary tool of Yogyakarta's 'cultural rule' was the *krama-ngoko* syndrome, which was developed and refined after the birth of the *kraton*.

#### はじめに

ジョクジャカルタは、「ジョクジャカルタ特別州」(Daerah Istimewa Yogyakarta)として、他の二つの「特別州」である「アチェ特別州」(Daerah Istimewa Aceh)および「首都ジャカルタ特別州」(Daerah Khusus

Ibu Kota Jakarta, 通常 DKI と略称される)と並んで、インドネシア共和国において特別の行政単位を構成している。このことは、ジョクジャカルタが、植民地時代以来「王侯領」(vorstenlanden)として一定の自治権を有していたことの名残りであると同時に、インドネシア共和国が成立した以降も共和国政府によってその自治性を公式に承認されたことを示している。植民地時代に同様の「王侯領」を構成していたスラカルタのスフナン

\* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

領 (Kasunanan, これに対してジョクジャカルタはスルタン領 Kasultanan と称された) が、独立後は中ジャワ州に吸収されてその行政上の権限を喪失したのに比して、対照的な扱いを受けたことになる。<sup>1)</sup>

このような扱いが、何よりも、現在のジョクジャカルタ家当主であるハマングブオノ 9 世 (Sultan Hamengkubuwono IX, 在位 1940—) の共和国建設 (ことに対オランダ独立戦争) に際しての〈功績〉に帰せられることは、広く指摘されている [Kahin 1952: Chaps. 13, 14]。このことの証左として、1946年から49年にかけてジョクジャカルタに共和国政府がおかれたという歴史的経験も広く語られていることであるが、このほかにも、9世の開明性についての指摘も通常広く語られている。たとえば Kahin はこのことを確信をこめて語っており [Kahin 1962: vi-vii]、また、Selosoemardjan は、独立後のジョクジャカルタの社会変化についての研究 [Selosoemardjan 1962] の主要な論点の一つとして、9世の開明的な行政改革をとりあげている。

ジョクジャカルタが〈特別であること〉 (keistemewaan) について語られる場合に顕著なことは、上に示したごくわずかの例からも窺える通り、それが次の二つの引照基準に基づいていることである。一つは、ジョクジャカルタがこの地に王宮と王都と王侯領を築いてきたジョクジャカルタ王家および王家の当主のあり方と切り離しえないということであり、もう一つは、ジョクジャカルタの keistemewaan は、そのほとんどの場合が、実は、ソロ (スラカルタ) との比較・対照に

1) 「ジョクジャカルタ特別州」の名称が最初に公式に用いられたのは、1942年8月の日本軍政下においてであった [Selosoemardjan 1962: 62 n]。なお、独立後7年間のジョクジャカルタについて一般的な情報は、Kementerian Penerangan [1953] を参照。

において提示されているということである。

ジョクジャカルタ王家もスラカルタ王家も、遠く16世紀末に成立したマタラム Mataram 王国にその系譜が連なるとはいえ、両王家が画然と分離してそれぞれ独自の王国を形成するのは18世紀の半ばであり、ジョクジャカルタという〈まち〉の歴史はたかだかこの200年ほどを数えるにすぎない。それにもかかわらず、ジョクジャカルタとソロとは、「ジャワ伝統文化を残す主要な世界」 [Kahin 1962: vi] とみなされ、そのゆえにまた、残余のジャワからとくに区別されて「ジャワ核芯域」 (Kejawen) ないし「内インドネシア核域」 (Inner Inner-Indonesia) [C. Geertz 1963] と規定されてきた。このことはすなわち、ジャワに成立してきた諸王朝の10世紀を越える興亡の歴史の、その最後の200年間に出現し並立して存在してきた中ジャワ南部の王家 (1755年にジョクジャカルタが分離し、1757年にソロからマングヌガラが分離し、のち1813年にはジョクジャカルタからパクアラムが分離するから、19世紀初頭には、マタラム王国の系譜に連なる4王家が分立することになる) において、ジャワ文化の〈正統なかたち〉が保持され、したがって、それらの王家がその〈かたち〉を顕現する窓口として機能してきたことを意味しているのである。

本稿はこれらの王朝の性格と機能を論ずるに当たって、三つの論点を試論的に提示することを意図している。論点の第1は、王権の性格とその変容ということがら、第2は、支配の内向性ということがら、第3は、特異な言語空間の成立ということがらである。

中ジャワの王朝が、すでに略述したように、ジャワ文化の Exemplary Center (範型の中心) として機能するのは、マタラムの分裂とジョクジャカルタ、スラカルタ両王家の成立を契機としていること、その際、王権の外縁を決定する主宰者として機能したオランダ

(オランダ東インド会社 VOC, およびオランダ植民地政府)の存在が決定的な役割を果たしたことで、その結果クラトン(kraton, 王宮)への文化的な凝集性は、王権の外縁を定義する者としてのオランダの参入が行われるにつど深化していったこと、そして、これをジャワ語の世界という言語空間のあり方に着目すれば、そこには、クロモ(krama)とングコ(ngoko)の二重性、ツリサン(tulisan)の伝統の衰退とリサン(lisan)の世界の緊密化に向かって進展する、特異な空間が成立していったこと、以上が、本稿の議論の要点である。これらは、いずれも、〈みやこ〉の創出とその帰結にかかわることがらである。これらの各論点は、別に仔細な検討を要すべきことがらであることはいうまでもないが、本稿はそのアウトラインを提示することによって、各論点の問題領域を示すことをこころみるものである。なお、本稿で設定した視点は、中ジャワの4王家の比較・対照を当然要請するものであるが、当面、ジョクジャカルタとスラカルタ、中でもジョクジャカルタ王家を念頭において論じたのは〈みやこ〉の創出という論点とのかかわりによるものである。

## I 〈みやこ〉の創出 (1)—— 王権の変容

### (1) 王権の性格

ジャワに成立した王国(kerajaan)の性格が論ぜられる場合に、二つの典型が認められる。第1は、Heine Geldernによって定式化され[Geldern 1942], C. Geertzによってあまねく流布された[C. Geertz 1968 ほか]典型で、王国がそのセンターであるクラトンによって定義され、クラトンが Exemplary Center であったことに力点をおくものである。これが、考察の主たる対象を文化的パラ

ダイムにおいていることはいうまでもない。これに対して第2の典型は、王国の性格を王権維持の構造や支配圏拡大の態様を通して示そうとするもので、多くのジャワ史に関する研究書が示すように、そこでは王朝の歴史は戦闘集団の制度化(戦闘の勝利、遠征、通婚圏の拡大)とその崩壊(王位継承をめぐる内紛、地方反乱、対抗勢力の台頭)の歴史として示される。あるいは、Schrieke [1955; 1957]のように、王権維持の構造に着目して、それが婚姻のネットワークを基礎とする家産官僚制として示される。

これらの二つのパターンが、実は同一の対象に対して、どの側面に着目するのか、という局面の切出し方の相違を反映したものにほかならない、と考えることは、妥当な理解のように思われる。たしかに、ジャワの王は、一方で、理念上の王としての完璧性を体現するものであり、他方で、現実の最高権力者としてその権力の維持に腐心するものである(たとえば, Ricklefs [1974: 22 passim], O'Malley [1977: 163, 201n-202n])が、この二つの要請は、それぞれに困難な要請である(たとえば S. Moertono [1968], B. Anderson [1972])だけでなく、しばしば相矛盾し相互に対立する要請であったから、それがジャワの王権それ自身の不安定性をもたらしていたからである(たとえば Ricklefs [1974: 1981], O'Malley [1977])。<sup>2)</sup> このうち、王権の前者の機能に着目すれば先に述べた第1のパターンが、後者の機能に力点をおけば第2のパターンが、王・王国の性格として論ぜられることになる。

2) この不安定性はまた、ジャワ島のとくに中東部が、独立の活火山の麓に土地生産性の高い扇状地をそれぞれ形成することを通して、自立的な政治空間が多数形成される潜在力をもっていたという「多中心性」によって一層強められた。このような指摘は C. Geertz [1963], Ricklefs [1974], O'Malley [1977] などにみられる。

しかし、15世紀以降のジャワの王朝の歴史を鳥瞰すると、ジャワ史は、18世紀半ばに創出されたジョクジャカルタ王家の成立を決定的な転換点として、戦闘集団から Exemplary Center へと王朝のあり方が変容し、クラトンが Exemplary Center としての役割をいけば自覚的に演ずることになったと考えられる。すなわち、モジョパヒト王国（1294年に成立し1478年に滅んだとされる）の崩壊時から、マタラム王国（1578年ごろに成立したとされる）の分離によるジョクジャカルタ王家の成立（1755）ないしマンクヌガラ王家の成立（1757）に至る、約300年に及ぶ期間のジャワ島中東部は、たえざる戦乱の渦中にあったといっても過言ではない。この長い期間、王と王権はまずもって、戦争、遠征、反乱の鎮圧を主たる任務とする戦闘集団として機能していたとみなしうる。

何よりも顕著であったことは、Exemplary Center として機能すべきクラトンが、頻繁に破壊ないし放棄されたことである。マタラム分離以前にもっとも長期間にわたってクラトンがおかれたのはカルタスラ（スラカルタ西方）であった（1680-1743）が、この約60年間も、クラトンは、スロパティの反乱（1686-1703）、王位継承をめぐる戦乱（1703-1708, 1718-1723）、中国人虐殺を契機とする大動乱（1740-1751）によって、軍事的に脅かされつづけ、ついには反乱軍の手中におちた（1742）のである。

## (2)ジョクジャカルタ王侯領の創出

この王侯領成立に至る過程で、のちにこの王朝の性格を規定することになる二つのことがらが進行したと考えられる。第1は、モジョパヒト時代までに形成されていた文化的遺産が徹底的に破壊されたことである。これは、主要な戦場が反乱と遠征とを問わず、モジョパヒトの中心地であった東ジャワ地方であっ

たことに何よりも起因する。<sup>3)</sup> 第2は、バタヴィアに中心をおきスマラン<sup>4)</sup>を直接の窓口とする VOC が、中ジャワで繰り広げられる権力抗争の第3の当事者としての機能を次第に強化しつつあったということである。VOCの軍事力が抗争勢力の一方に加担するというパターンは、アマンクラット1世（Amangkurat I, 在位1644-1677）の死の直前から開始され、それ以降は、マタラムの王位継承をめぐる内紛と抗争に際しての常態として進展し、そのつど、VOC はぼう大な戦時負債をマタラムに負わせることになる。

ジョクジャカルタの成立は、次の2点において、ジャワ史を画するものであった。第1は、この王家が VOC と反乱軍のリーダーの間に交わされた〈条約〉によって成立したということである。これはギヤンティ（Giyanti）の和議と呼ばれ、VOC を代表してスマラン駐在の VOC 北部ジャワ東北沿岸州長官 Nicolaas Hartingh と、スルタン・マンクブミ（Sultan Mangkubumi）の間で交わされ、ジャワ語とオランダ語で記された。<sup>5)</sup> そこでは、VOC がマンクブミに対し、スルタン・アグン（Sultan Agung, 在位1613-1645）以来のスルタン称号を授与し、マタラム王国の

- 3) モジョパヒトの崩壊からジョクジャカルタ成立に至る期間のジャワ文化の破壊については、たとえば B. Anderson [1981] を参照。また、モジョパヒト期の文化遺産（たとえば叙事詩ナガラ・クルタガマ Negara Kertagama）がバリ島で発見され、バリを通して古ジャワの社会と文化を再構成しようとする傾向もまた、15世紀から18世紀にわたるジャワ文化の不連続性を示している。
- 4) スマランには、1748年から1808年に至る中ジャワの王権の再編成の時期に、VOC の「東北海岸管轄府」がおかれ、管轄官（gouverneur）が派遣されていた。この管轄官は中ジャワの権力抗争に際して直接間接に関与する一方、年ごとに各王家に対するその影響力を増していった。
- 5) ギヤンティ条約の成立に至る過程とその内容については、Soekanto [1952] および Ricklefs [1974] に詳しい。

所領の半ばを与えること、一方スルタンは、年額1万リアル（スペイン・ドル）の収入とひきかえに「ジャワ北岸地域」(pasisir)をVOCに譲渡すること、また、王侯領のパティ（patih, 首相）の任命と解任はVOCの同意の下に行うこと、などを骨子とする条項がもりこまれていた。さらに、ギヤンティでの両者の会談（1755年2月）で、新たにマンクブミの支配下に入る「世帯」(cacah)数を、87,050と定め、スラカルタのそれを85,450と定めた。<sup>6)</sup>このように、この〈条約〉では、VOCを主体として、VOCがマンクブミの称号と所領（外縁）を定義し、ここに、新しい王国ジョクジャカルタが創出され、マンクブミはスルタン・ハマングブオノ1世（Sultan Hamengkubuwana I, 在位1749-1792）としてこの王家の創始者としての地位を保証されることになる。<sup>7)</sup>

このようにジョクジャカルタは、〈条約〉に基づいて成立したこと、〈条約〉締結行為の主体がVOCであったこと、さらに、王国の「外縁」が明確な数字によって確定されて

いたことにおいて、ジャワ史を画する王家の出現であった。

第2に、このことは、おのおのクラトンと家臣団と臣民と領土を有し、その所領を隣接させる二つの王家（のちに四つ）が、中ジャワの南部平原に並立するに至ったということの意味した（ジョクジャカルタとスラカルタは六十数キロの距離を隔てるにすぎない）。これらの王家は、政治的には相互に反目と敵意を繰り返しつつ、また、そのすべての場合にオランダによる調停と裁可を仰ぎつつ、そして、そのつど政治的な力をオランダに剝奪されつつ、今日に至るまで存在してきた。<sup>8)</sup>ジョクジャカルタにおいても、そこにクラトンが建設されて以来、すでに230年近くが経過した。

このことは、オランダによるクラトンの「封印」という状況を示すことがらであった。ここに、「封印」とは以下の諸点を意味する。①各王家の内部と王家の間とを問わず、紛争（ないし紛争の危機）が生じた場合、オランダはつねに現状を維持する方向（4王家の外縁の固定化）で、裁可者として機能したこと。②この機能は、クラトン内部ないしクラトン間の政治的配置図をオランダが決定する（王位継承者の承認とパティ<sup>9)</sup>の人事権の掌握が、その根幹をなす）方向において、時代の進展とともに強化されたこと。③この機能は、オランダ自体の軍事力とオランダが維持したマンクヌガラ軍（Mangkunegara legion）によって物理的に保障され、複数の王家の並存という状況によって効率的に発揮されたこと。

6) このうち、ヌゴロ・アグン（Negara Agung）と呼ばれる「内域」において各王家とも53,100「世帯」、モンチョ・ヌゴロ（Manca Negara）と呼ばれる「外域」において、スルタン（ジョクジャカルタ）が33,950「世帯」、ススフナン（スラカルタ）が32,350「世帯」と定められた。この条約は現実に遂行され、それぞれの「世帯」数に見合っただけでマタラムの領土は2分割されることになったが、「世帯」支配を根幹とするこの分割方式の結果、いくつかの地域では、両王家の所領が飛び地として形成され、所領はきわめて入り組んだものとなった。なお、Ricklefsはこの「世帯」が、同時にまた調達可能な兵員数でもあったと考えられる、という指摘をしている [Ricklefs 1974: 422-423n]。

7) ハマングブオノ1世の在位が1749年であるのは、この年、彼がジョクジャカルタでスルトンの称号を名乗ったことによる。とはいえ、その後も内乱は続行し、彼がジョクジャカルタにその地位を安堵されるのは、ギヤンティの和議を契機としていることはいうまでもない。

8) この経緯については、さし当り Ricklefs の2書 [1974; 1981] を参照。

9) パティは王領の実際の行政を司る最高位の者であったから、彼がVOCに対してloyaltyを示すことは、VOCにとって必須のことからであった。

すなわち、中ジャワの諸王家は、その成立以降、政治権力としてはますます無力化し、政治権力として無力であることにおいて、その存続を保証されてきたのである。このことを〈みやこ〉のあり方としてみるならば、文化の唯一のセンターとしての機能をクラトンが異様に拡大し、その結果、次節で述べるように、クラトンによる王侯領支配の様式は、すぐれて内向性を示すに至ったのである。

## II <みやこ>の創出 (2)—— 支配の内向

### (1)文化の競合

ジョクジャカルタの成立とそれにとまなうマタラムの分離の固定化は、ジャワの中東部における大規模な戦乱の終息をもたらした。分離以降のほぼ半世紀は、おのおのの王家は長期にわたって王位の継承がなく、各王家は安定した状態でおのおの新しいクラトンの建設につとめた。<sup>10)</sup> その後、1810年からほぼ20年間、パクアラム家の分立とディポネゴロ戦争(1825-1830)によって中ジャワは再び騒擾の渦中に入ったが、1830年以後、先に述べた「封印」の状況が一層進展することによって(すなわち、王家の政治権力の一層の無力化によって)、中ジャワには平和が維持された。

1750年代後半から1800年代の初頭の半世紀間と1830年以降の王家では、このようにしてクラトン文化が開花した。そこでは、各クラトンがそれぞれに Exemplary Center として機能することになった。このセンターの主た

10) マタラム分離の前後に即位した王の在位期間を見ると、ハマクブオノ1世が足かけ44年、パクブオノ3世が40年(1749-1788)、マンクスガラ1世が40年(1757-1796)と、それぞれその在位期間は長期にわたっていた。これはジャワ史において(とくに19世紀と比較すると)まれなことであった。

る役割は、「古のジャワの理想型」を再生することを根幹としていた。「古のジャワ」の再生とは、モジョパヒトの崩壊以降の戦乱の時代、ことにスルタン・アグンの遠征<sup>11)</sup>をアンチクライマックスとして破壊された文化遺産を、ジャワ文化の正統な〈かたち〉として再現してみせることであった。

この場合に顕著なことは、複数の王家すなわち複数のクラトン(Exemplary Center)が存在し、これらのセンターの間の情報の流通がますます頻繁になることによって、文化の様式が競合的に創出されるという状況がもたらされていたことである。この競合は、様式の細部における微妙な差異として顕現され、微妙な差異は時とともに進展した。

中ジャワのクラトンの建設は、このように、おのおのが「ジャワ文化のルネサンス」<sup>12)</sup>の担い手であることを主張し、おのおのが Exemplary Center を創設することを意味した。〈みやこ〉が政治的に創出される

11) たとえば Fruin-Mees の『瓜哇史』に次のようにみえている(松岡訳による)。

「此邦土は打続く戦乱によりて甚しく荒廢し、水田は荒蕪に帰し、或は休耕し、家畜は斃死せり。伝染病勃発してパネンバハン(スルタン・アグンの父、Panembahan Seda ing Krapyak、在位 1601-1613)の軍隊中にも猖獗を逞うし、兵数甚しく減じたる故に、王は退陣せざるを得ざりき……」[フロイン・メース 1922: 315 (Fruin-Mees 1920: 86)]。また、「其間王(スルタン・アグン)は間断なく征戦を営み、其襲撃せる敵は盡く彼に降りたり。パスルアンは1617年投降し、再度背反せるパジャンは1618年陥落せり。此地方の人民はつとにウィロソボに於てなされたるが如く、大部分マタラムに移され、同地にて勞役に服し、パジャンの首都は荒野となれり。トゥバンも亦1619年膝を屈せざるべからざるに至れり……」[同上書: 331 (ibid.: 97)]。

12) 「ルネサンス」の用語は、Pigeaud がスラカルタのヨソディプロ父子の時代の文芸活動の興隆を評して用いた[Pigeaud 1967]が、文芸の興隆は他のクラトンにおいても等しく認められることがらであった。

のに相ともなって、〈みやこ〉がその様式をととのえ、また、〈みやこ〉が政治的に無能化するのに相ともなって、〈みやこ〉の文化が内展 (involution) していくというのが、中ジャワの王都の状況であったように思われる。

## (2) 「ルネサンス」の競合

ジョクジャカルタにおけるクラトンの建設は、「ジョクジャカルタ・スタイル」のジャワ文芸と芸能の創出という行為を中核として行われた。事情は、ほかの王家でも同様であった。それぞれがジャワの正統な文化の〈かたち〉を継承ないし再現していることを自認しつつ、それぞれに相異なるスタイルを作り出していった。それは、踊り (tari)、歌謡 (tumbang)、ワヤン (ワヤン劇の物語とワヤン人形の形姿)、家臣団の衣裳、クラトン儀礼のフォーム、パティックの紋様と色調、等等、およそ人間集団の観念と心理とが表出されるすべての領域に及んでいったと考えられる。それらは、いずれもクラトンをその「範型」の起点とし、Exemplary Center としてのクラトンの機能を強化するものであった。「ジョクジャカルタ・スタイル」(cara Yogyakarta), 「スラカルタ・スタイル」, 「マングラハ・スタイル」と呼ばれる際のスタイルとは、それぞれのクラトンにその原型をもち、それに由来すること、すなわちクラトンに起源を発すること、を物語っているのである。アスリ (asli) という言葉がそれを示している。

この中で、Exemplary Center としてのクラトンの正統性を証する上でもっとも顕著なものは、言語による秘義の創出、すなわち、「年代記」(babad) を作成するという営為であった。

18世紀の後半以降、中ジャワの各クラトンでは、このような「年代記」が数多く書き記

された。

ジョクジャカルタでは、マングブミの王子 (のちのハマングブオノ 2 世, 在位 1792-1810, 1811-1812, 1826-1828)<sup>13)</sup> によって、*Babad Mangkubumi* (『マングブミ年代記』, 1773年と92年に成立), *Serat Surya Raja* (『スルヨ王の書』, 1774年3月作成, この書はジョクジャカルタ王家の家宝 pusaka の一つとなる) が編まれたほか、ジャエングラット (Raden Tumenggung Jayengrat) によって *Babad Kraton* (『クラトン年代記』, 1777年から78年にかけて成立) が編まれ、また、*Serat Sakondor* (『サコンドルの書』, 1808年から12年にかけて成立) が編まれた。<sup>14)</sup> 19世紀に入ると、パクアラム家の2世 (在位1829-1858) および3世 (在位1858-1864) は同種の書をさかんに編み、<sup>15)</sup> ハマングブオノ 5 世 (在位1822-1826, 1828-1855) もこのような文芸活動をさかんに奨励した。

スラカルタにおける「年代記」作成の活動は、さらにさかんであった。<sup>16)</sup> ここでは、ヨソディプロ (Raden Ngabei Yosodipuro, 1729-1802) によって *Babad Gijanti* (『ギヤンティ年代記』, 作成年不詳) が編まれ、パクブオノ 4 世 (在位1788-0182) の時代に *Babad Tanah Jawi* (『ジャワ年代記』) が編まれたほか、5 世 (在位1820-1823) は *Serat Centhini* (『チェンテニの書』) の編纂を命じ、ヨソディプロ家に連なるロンゴワルシト (Raden Ngabei Ranggawarsita, 1802-1873) はスラカルタ家最後のプジャンガ (puja-

13) ハマングブオノ 2 世が三たびにわたって即位しているのは、19世紀初頭の植民地権力の交代 (オランダ→フランス→イギリス→オランダ) の過程で、そのつどバタヴィアの支配権が王家に及んだことを示している。

14) Ricklefs [1974] による。

15) パクアラム家の文芸活動については、K. H. Dewantara [1931] を参照。

16) Pigeaud [1967] に詳しい。

ngga, 宮廷詩人)として *Pustakaraja Purwa* (『古の王の書』), *Pramayoga* (『至福の時代の書』)をはじめとして、ぼう大な史書を書き残した。また、マンクヌガラ家においても、4世(在位1858-1881)は *Wedatama* (『智恵の書』)の編纂をはじめ、文芸の分野でさかんな活動を行なった。

このうち、ジョクジャカルタの「年代記」は、ジャワ暦の新世紀(18世紀, 西暦1774年)を迎えるに当って、新王朝の創設を言語表現のうちに定位するという性格を明瞭に示していた[Ricklefs 1974: Chaps. VII, XI, XII]。そこでは、ジョクジャカルタのクラトンがカルタスラのクラトンの崩壊以降のジャワの王朝の系譜を正統に継承することを示す(*Babad Kraton*)か、ジャワがやがて再び統一されたとき、ジョクジャカルタこそその統一ジャワの唯一のクラトンとなることを暗示する(*Serat Surya Raja*)か、あるいは、バタヴィアに居をおく VOC を西ジャワのパジャジャラン王国の後継にみたてて、VOC をジョクジャカルタ王家の外戚として定置することで、VOC に対するジョクジャカルタのクラトンの優位性を示す(*Serat Sakondor*)か、おのおのに強調される局面の相違はあっても、いずれもクラトンが Exemplary Center であることを言語によって表現するものであった。そこでは、「書き言葉の世界」(*jagad tulisan*)の伝統がクラトンにおいて秘義として成立していく過程が認められるのである。

この *jagad tulisan* は、先に述べた芸能の諸分野、ことにワヤン劇の台本 (*lakon*) の作成とその上演を流通手段として、「話し言葉の世界」(*jagad lisan*)へと拡大・拡散し、*jagad tulisan* が *jagad lisan* へと浸潤していく過程が進行していったと考えられる。すなわち、クラトンにアスリとして存在している、秘義としての *jagad tulisan* に、*jagad*

*lisan* が包摂されていく過程である。ここで、*jagad tulisan* の極を〈みやこ〉ないしクラトンとすれば、*jagad lisan* は、この〈みやこ〉を圍繞しこれに向かって収斂していく〈むら〉の世界である。

〈条約〉によって王と王侯領と家臣団と臣民とが創出され、そもそものはじめから限定されたこの空間において文化がいちじるしく求心性を示すという点において、ジョクジャカルタは(他の中ジャワの王朝も同様)、その支配の様式がすぐれて内向的であった、ということができそうである。ここに内向とは、「跪拝」(*sembah*)の構造が制度化されていくことを意味する。

### III ジャワ語の言語空間

#### (1) クロモとンゴコ

中ジャワにおいて、Exemplary Center としてのクラトンの存在を最終的に保証しているのは、ジャワ語という言語空間であり、支配の内向性をもっとも制度化されているのも、この言語空間である。<sup>17)</sup>

クロモという「優雅なジャワ語」とンゴコという「粗野なジャワ語」の二重性が、*jagad lisan* のすべての領域で間断なく意識され、この二重性が機能しているのである。「ジャワ人になる」とは「ジャワ語」を正しく使えるようになることと同義である、といわれ

17) Seloemardjan は、クラトンが言語表現の様式性とこれにともなう所作の厳密性において、そこに入ったジャワ人を恐怖感におとしこむことを指摘し [Seloemardjan 1962: 25], J. Siegel はジャワ人自身がしばしば「ジャワ語(すなわちクロモのジャワ語)がいかにもつかしいか」ということをなげくのを耳にし [Siegel 1982] ている。なお、ジャワ語の言語空間についての分析および問題提起として、B. Anderson [1981] および K. Tsuchiya [1981; 1982] がある。



る)。<sup>18)</sup> ある特定のレベルのジャワ語をある特定の局面で適切に選択して、それを誤りなく用いること、および、その特定のジャワ語が特定の所作(表情, 振舞いなど)を規定すること、それが話し言葉としてのジャワ語の特性である。また、使用可能なものとしてストックされた言語レベルが多岐に及んでいるほど,<sup>19)</sup> その言語空間はクラトンに近く、そのストックが乏しいほどそれはクラトンから遠い(「粗野」である)という理解が前提とされている。その意味で、Exemplary Centerとしてのクラトンは、まずもって「ジャワ語の世界」(jagad basa Jawa)のセンターである。

このような観察は、現在のジャワ語について一般的に認められることであるが、それを18世紀半ば以降の中ジャワの王朝のあり方の中でとらえなおしてみると、次のようないくつかの論点が提示できそうである。

①ジャワ語におけるクロモの起源は定かではないが、中ジャワにクラトンが成立して以降、クラトンを唯一の生産地として、いちじるしい展開を示した。それは、かなり人工的な造語として jagad tulisan(「年代記」, ワヤン劇の台本, クラトンの公文書など)のうちに現われ、それが次第に jagad lisan(クラトンでの儀礼, 伺候など)に浸潤していったこと。これを通して「古のジャワ」の再生が同時に意図されていたであろうこと。クロモのうちには、すでに死語と化していたサンスクリットが多数含まれていること<sup>20)</sup>が、以上のことを推察させる。

②クロモがクラトンと家臣団の jargon から、広く〈むら〉(jagad lisan)の世界へ浸潤していく過程は、いくつかのチャンネルを通じて進行したが、その進行は先に述べたクラトンの「封印」がすすむのに相ともなって加速されていったと考えられること。主要なチャンネルは、ワヤン劇の上演における Exemplary Center の再現であるが、これに加えて、オランダ支配の深化にともなって制度化されていった「伺候の様式」(いわゆる hormat 制)<sup>21)</sup>がその一層の浸潤をうながしたことが推察される。

③クロモのソゴコへの浸潤とそれを通じて顕現される「跪拝の構造」を最終的にかつ決定的に制度化したのは、19世紀末以来導入された西欧的な教育制度であったこと。ここでの要点は、ジャワ語が「教科」となったことによって、その正統なかたちを決められ、それが印刷(教科書と教材)を通して教授され流布されていったことである。「標準ジャワ語」<sup>22)</sup>はこの過程で王侯領を越えてジャワ語の言語空間に浸潤する一方、新たに生れたジャワ語の教師たちはその浸潤を制度的に担うという機能を果たすようになる。<sup>23)</sup>

21) Hormat 制については、Sutherland [1979] に詳しい。

22) この過程で「標準ジャワ語」として採用されたのは、あとに述べる Javanologie の主要な活動の舞台となったスラカルタ王家のジャワ語であった。

23) 今世紀以降、もっとも由緒正しいジャワ語会話を維持してきた主要な担い手は、ジャワ語教師の家庭であったという(コーネル大学ジャワ語講師 Amrih Widodo 氏による)。また、スンダ語圏においても近代的な学校制度の導入にともなって「標準スンダ語」がかたちをととのえたが、オランダ人言語学者とスンダ人のインフォーマントとの共同作業になるこの「標準スンダ語」においては、現実にはいかなる地方においても用いられていない用語と用法とがしばしば現われることになったという(大阪外国語大学客員教授・作家 Ajip Rosidi 氏による)。

18) これについての指摘は H. Geertz [1961: 105]。この論点を展開したものとして B. Anderson [1972: 2-10] がある。

19) ジャワ語のスピーチ・レベルの多様性については、Soepomo [1968: 54-81] に詳しい。

20) たとえば Soepomo のリスト [Soepomo 1969: 165-190] を参照。

クロモとンゴコというジャワ語のあり方は、以上の論点を前提とするならば、18世紀半ば以降のクラトンを培養器として誕生し、オランダ支配の深化とそれとともにクラトンの被拘束性（その顕在化が Exemplary Center である）によって成長していったことになる。そこでは、〈むら〉が〈みやこ〉に収斂していく〈かたち〉とその収斂の内向性とは、あますところなく示されたのである。

## (2) jagad tulisan と jagad lisan

ジャワ語の言語空間を特徴づけているもう一つの局面は、lisan の tulisan に対する圧倒的な優越性である。現在ジャワ語を母語とする人々はおそらく6,000万人を超えているにもかかわらず、出版市場に現われるジャワ語の書物はまことに眇たるものにすぎない。ジャワ語の jagad tulisan は、ほとんど死滅したかにさえ見える。

このことを18世紀半ば以来の王朝のあり方の中でとらえなおしてみると、ジャワ語という言葉がたどった運命について、次のようないくつかの論点が提示できそうである。

①ジャワ学 Javanologie の展開と tulisan の伝統の死滅。<sup>24)</sup> 18世紀半ばから19世紀初頭にかけてクラトンが「文芸復興」のセンターとなって以降、クラトンは tulisan の伝統の排他的な担い手であり、プジャンガがその伝統の継承者であった。この状況は、1830年代以降オランダの言語学・歴史学・考古学などがジャワを対象にした研究を制度化し、いわゆる Javanologie がライデン大学を核として成立する過程で、大きく変化した。ジャワ語を定義し（辞典の編纂）ジャワ史を再現し（碑文研究、古ジャ

ワ語研究）ジャワ文化の輪郭を描く（年代記研究、ワヤン研究、儀礼研究）というような活動のイニシアチブは、あげて Javanologie の下に移行した。加えてまた、Javanologie は、その研究の成果を公表し共有し継承することによって、それ自身の伝統を構築していった。こうして、クラトンの秘義の伝統は Javanologie によって対象化される——秘義からジャワ学への移行——ことになる。ロンゴワルシトは、このような Javanologie がクラトンに浸潤する時代のさなかに生きたプジャンガであった。<sup>25)</sup> そして彼は最後のプジャンガとなったのである。Javanologie の成立と展開の過程と軌を一にして、クラトンの tulisan の伝統は消滅していくのである。

②Tulisan の代位としてのクロモ。<sup>26)</sup> Tulisan の伝統がクラトンにおいて衰退していく過程は、クラトンの「封印」化が一層進行し支配の内向性が加速される過程と重なり合うことによって、実は、クロモがンゴコの世界にあまねく浸透していく過程と重なり合っていた可能性がある。ンゴコの世界とはすなわち lisan の世界 (jagad lisan) である。こうして、クロモはこの jagad lisan の表層に、あたかも jagad tulisan がおおうように拡散していくことになる。クロモのもつ tulisan 的機能（言語選択と言語配置の厳密性、言語表現によって顕在化された対話者間の関係の様式性）が、このことを支持している。要するに、ジャワ語においては、クロモが tulisan の機能を代行する（人々が「物を書き記す」

24) これについては、筆者は別に詳しく論じている [Tsuchiya 1982]。なお、Uhlenbeck [1964] を参照。

25) ロンゴワルシトについては、A. Day [1981], A. Any [1979; 1980], B. Anderson [1976; 1981], K. Tsuchiya [1982], 関本 [1982] など、近年、内外で研究者の関心が高まっている。

26) これについては、Siegel [1982] および Tsuchiya [1982] において論ぜられている。

がごとくクロモを用いること) ということである。

③ンゴコの緊密化。<sup>27)</sup> ①および②の論点から、ンゴコの緊密化という第3の論点が導き出される。それは、クロモがンゴコの世界を浸潤するにしたがって、「本来の言語」としてのンゴコの世界すなわち jagad lisan は、一層、緊密化するという論点である。クロモが「不自由な言語」であればあるほどに、ンゴコは「解放された」、「自由な」言語となる。ンゴコの語彙は著増し造語と略語が頻用され、話し言葉のスピード自体が増加する。19世紀から20世紀にかけての社会的文化的な激しい変化がこのことを加速し、ンゴコで語られる話題が増加しつづける。Jagad lisan が、「おしゃべり」(ceréwét) に充たされるという状況の現出である。このような過飽和状況にある jagad lisan は、ワヤンやロンゴワルシトを語り継ぐ世界 [関本 1982] である。一方また、これがオランダ語ないしインドネシア語という新しい言語世界に出会ったとき、一挙に tulisan の言語(新聞、雑誌、機関誌など)として沈澱することになる。

ジャワ語における言語空間のこの新たな展開が、今世紀の民族主義の時代を内的につらぬいていく、一つの主要なモチーフとなることはいままでもない。

#### 引用文献

- Anderson, Benedict. 1972. *Java in a Time of Revolution*. Ithaca and London: Cornell University Press.  
 ———. 1976. A Time of Darkness and a Time of Light: Transposition in Early Indonesian Nationalist Thought. A paper prepared for the Congress of Human Sciences at Mexico

27) これについては、Tsuchiya [1982] において論ぜられている。

- City.  
 ———. 1981. Sembah-Sumpah: The Politics of Languages and Javanese Culture. A paper for the Conference on Multilingualisme in Modern Indonesia at Cipanas.  
 Any, Andjar. 1979. *Jayabaya, Ranggawarsita dan Sabdapalon*. Semarang: Aneka.  
 ———. 1980. *Raden Ngabehi Ranggawarsita Apa Yang Terjadi?* Semarang: Aneka.  
 Day, Anthony. 1981. Meanings of Change in the Poetry of Nineteenth-Century Java. Ph. D. Dissertation. Cornell University.  
 Dewantara, K. H. 1931. *Beoefening van Letteren en Kunst in het Pakoe-Alamsche Geslacht*. Yogyakarta.  
 フロイン・メース. 1922. 『瓜哇史』松岡静雄(訳). 東京: 岩波書店. (原著 Fruin-Mees. 1920. *Geschiedenis van Java*. Weltevreden: Uitgave van de Commissie voor de Volkslectuur.)  
 Geertz, Clifford. 1963. *Agricultural Involution*. Berkeley: University of California Press.  
 ———. 1968. *Islam Observed*. Chicago: University of Chicago Press.  
 Geertz, Hildred. 1961. *The Javanese Family: A Study of Kinship and Socialization*. Glencoe, Ill.: The Free Press.  
 Geldern, Heine. 1942. Conception of State and Kingship in Southeast Asia. *The Far Eastern Quarterly* 2 (November).  
 Indonesia, Kementerian Penerangan. 1953. *Republik Indonesia. Daerah Istimewa Jogjakarta*. Jakarta: Kementerian Penerangan.  
 Kahin, G. M. 1952. *Nationalism and Revolution in Indonesia*. Ithaca: Cornell University Press.  
 ———. 1962. Preface. In *Social Changes in Jogjakarta* by Selo Soemardjan. Ithaca: Cornell University Press.  
 Moertono, Soemarsaid. 1968. *State and Statecraft in Old Java, A Study of Later Mataram Period, 16th to 19th Century*. Cornell University Monograph.  
 O'Malley, Willy. 1977. Indonesia in the Great Depression: A Study of East Sumatra and Jogjakarta in the 1930's. Ph. D. Dissertation. Cornell University.  
 Pigeaud, Th. 1967. *Literature of Java*. Vols. 1-4. The Hague: Martinus Nijhoff.  
 Ricklefs, M. C. 1974. *Jogjakarta under Sultan Mangkubumi, 1749-1792, A History of the Division of Java*. London: Oxford University Press.  
 ———. 1981. *A History of Modern Indonesia*,

- C. *1300 to the Present*. London and Basingstoke: The Macmillan Press.
- Schrieke, B. 1955 (Part I); 1957 (Part II). *Indonesian Sociological Studies*. The Hague: Van Hoeve.
- 関本照夫. 1982. 「サウイト事件の文化論的考察」『千年王国的民衆運動の研究』鈴木中正(編)所収. 東京大学出版会.
- Selosoemardjan. 1962. *Social Changes in Jogjakarta*. Ithaca: Cornell University Press.
- Siegel, J. 1982. *Function of the Javanese in Surakarta*. Ithaca. (Mimeographed)
- Soekanto. 1952. *Sekitar Jogjakarta, 1755-1825 (Perdjandjian Gijanti—Perang Diponegara)*. Jakarta: Mahabarata.
- Soepomo, P. 1968. Javanese Speech Levels. *Indonesia* 6.
- . 1969. Wordlist of Javanese Non-*Ngoko* Vocabularies. *Indonesia* 7.
- Sutherland, H. 1979. *The Making of a Bureaucratic Elite*. Singapore: Heinemann Educational Books.
- Tsuchiya, K. 1981. Sebuah Catatan pada Bahasa Indonesia Ciptaan dari Kalangan Taman Siswa pada Tahun Tigapuluhan. A paper for the Conference on Multilingualisme in Modern Indonesia at Cipanas.
- . 1982. *Pemikiran Politik Indonesia, Pendahuluan*. Ithaca. (Mimeographed)
- Uhlenbeck, E. M. 1964. *A Critical Survey of Studies on the Languages of Java and Madura*. The Hague: Martinus Nijhoff.